

第20回連続講演会

冒険探検における環境教育について、じっくり語り合おう

関野 吉晴 氏

グレートジャーニー探検家・医師

一橋大学在学中に同大探検部を創設し、1971年アマゾン全域踏査隊長としてアマゾン川全域を下る。その後、25年間に32回、通算10年間以上にわたって、南米への旅を重ねる。その間、医師（外科）となって、武蔵野赤十字病院、多摩川総合病院などに勤務。その間も南米に通い続けた。1993年からは、「グレートジャーニー」を始め、足かけ10年の歳月をかけて、2002年2月10日タンザニア・ラエトリにゴールした。



皆さんこんにちは、関野です。そちらの冊子のほうにも軽く書いてはいるのですが、少し自分の略歴を話そうと思います。

ちょうど四十年前に一橋大学に探検部を作って、それで8年間大学にいて卒業したら探検部がつぶれてしまいました。それから医者になろうと思って横浜市大の医学部に入ったのです。探検部を作って主に行ったのはアマゾンです。それから10年間はアマゾンばかり。その後10年はアマゾンからは出たのですが南米からは出ませんでした。20年間南米ばかり通っていました。やっていた事は何かというと、アマゾンやアンデス、パタゴニア、ギアナ高地などの人たちと同じ屋根の下で同じものを食べて暮らすということです。僕の表現では自然に近い人と言っているのですが、別の表現でいえば自然と一体となって暮らしている人たちです。アマゾンなどではもちろん電話も郵便局も無線もないわけで、いきなり行くわけです。いきなり行って泊めてくださいって言うわけです。なおかつ図々しくて同じもの食べたいので食べさせてくださいって言います。その代わり何でもしますからと。何でもするつもりで行くのですが、結局足手まといになります。ですから結局子どもたちと遊んでいることが多くなるわけですが、そういうことをずっとやってきてアマゾンの人たちを好きになって、この人たちとずっと付き合っていきたい、あるいは旅を続けたいと思うようになりました。そのためにはどうしたらいいのか、社会に出て食べていかなければいけないし、でもこういうことを続けていきたい。どうしたらいいのか。選択肢はたくさんありました。研究者になったりジャーナリストになったり、あるいは写真家もある。いろんな選択肢はあったのですが、アマゾンやアンデスで世話になった人たちを取材や調査の対象にたくないという気持ちがありました。つまり友達でいたかったわけです。それにはどうしたらいいか。「何でもします」と言いながらも何にもできない自分を感じながら、もしかしたら医者になったらこの人たちを助けていけるかもしれないし、食べていけるだろうと思い医学部に入りなおしました。というわけで学生を14年間やって、医師になった今でも旅を続けています。

〈新しいグレートジャーニーへ〉

20年間南米の旅を終わってから始めたのがグレートジャーニーという旅で、アフリカで生まれた人類が世界中に拡散していくわけですが、その中でも一番遠くまで旅した人たちがシベリアーアラスカ経由で南米最南端まで行ったわけなのですが、その旅路を逆ルートで動力を使わないというルールを決めて、

自分の腕力脚力、あるいは動物の力をかりてアフリカまで足掛け 10 年の旅を終えてそしてその旅を終えた段階で、世界の辺境を旅してきた日々が 5000 日近くなりました。ところが、自分で気がついたことが、自分の生まれた所や住んでいるところなど、足元を知らないことに気がつきました。それを非常に実感した。それでもう少し自分の足元を見てみようと思いました。自分の生れたところはどこかということ、東京の下町で零細企業の職人や商店が軒を連ねるところです。いわゆる東京でも一番人口密集している地帯です。そこに革のなめし工場がずらっと並んでいて、全国の豚のなめしの 8 割をやっているという地域が私の生まれた場所のすぐ近くにあったので、僕はあまり調査というのが苦手なので、工場に行って「働かせてください」と言って働かせてもらったのですが、いろいろなことに気付きます。22 人の零細工場ですけれども半分が色の黒い人たちです。ナイジェリアとかバングラディッシュ、ウガンダとかそういうところから来ている人たちで、しかも不法滞在です。工場の上にアパートがあつてほとんど一歩も出られません。特に石原慎太郎都知事になってからは不法滞在をいきなり取り締まるようになって、ほとんど一歩も外に出られないような状態です。そういう外国人労働者の問題にぶつかります。それだけではなくて肉とか皮を扱う人たちは昔から「えた」と言われて差別されてきました。そういう差別の問題にぶつかる。あるいは高齢者問題です。工場で一番若い人でも 38 歳。ほとんど後は 50 代 60 代、70 歳を越える人たちもいます。そういう職人の高齢化。後はもう一つは本当に景気が悪い。なぜかということ産業の空洞化でさらに景気が悪い。そこら辺には在日朝鮮人がたくさん住んでいる。私はそういうところで生まれて育ちました。そういうことを実は私はここが被差別人の地域だということを全然知らなかった。同級生にもそういう出身者がいっぱいいたわけですがけれども全然気が付きませんでした。小学校の時の恩師になぜそういうことを教えてくれなかったのと聞いたら、そのことには触れないようにと校長に言われていたらしいのです。ところが今は違います。積極的にそれをなくそうとしています。そういう日本の縮図みたいな問題にぶつかっているいろいろな気付きがありました。今住んでいるところはここからすごく近くて自転車で 10 分くらいの所に住んでいます。大学が最初一橋大学だったので東京の西部というものに興味がありました。東京の西半分は森で囲まれているわけですね。ほとんど杉・ヒノキの木で、しかも荒れ放題です。それをどうにかしようというボランティア団体があつたのでその人たちと付き合いったりしました。あるいは、自分の先祖を調べたことがあるのですが、調べるのは簡単なのです。どうするかということ、頬の粘膜をちょっと擦ってそれを分析するとミトコンドリア DNA の塩基構造が分かります。それを分析して世界中の民族あるいは日本人でもいろいろな時代の人たちの遺伝子の構造が解析されてデータベースに収められています。それらと私のミトコンドリア DNA とはどの民族と似ているのだろうと照合していったわけです。そしたら礼文島の縄文人と一致したのです。両親が礼文島の DNA と一緒かということそうではない。私と父親とではミトコンドリア DNA は違います。母親と同じなのです。母方のおじちゃんとはまた違います。母方のおばあちゃんと同じなのです。そうやって母方を辿っていくことができたのです。母方を辿っていった先祖が北海道の縄文人だということがわかってものすごく縄文人に親しみを覚えてきました。北海道での直接の子孫であるアイヌや東北のマタギとかの人たちとも付き合いようになりました。そうやって国内という足元を見ることによって自分たちは日本列島になぜ、どのようにやってきたのかを探る旅をしたいと思って調べてみたのです。そうしたら結局あらゆるところからやってきたというのが分かりました。本当にいろいろなところからやってきて混血したという日本というのは吹きだまりなわけです。今は電話やメール、ラジオや TV という物があるから青森や鹿児島の人たちといつでも会話が出来ます。マタギの村というのは山形と新潟の県境ですけれども、どんどん高齢化していて 70 歳以上の人たちがほとんどです。でも、その方たちはすごい人たちで山も急な斜面も直登なのです。私と彼らが話す言葉はわか

ります。でもじいちゃん同士で話している言葉はほとんどわかりません。青森もそうです。シベリアからたまたま青森行きの飛行機に乗って帰る時に私の席の前に座っている人の会話が聞こえるのですけれども、どこの言葉か分からないのですね。最後にその人に声かけられたのですけれども日本語だったのです。つまり日本人だったのです。青森の人同士でしゃべっていると全然何言っているのか分からないのです。そのように言葉にも非常に変異があるし、人の顔、日本人ほどいろんな顔が揃っているところはないですし、血液型も全部そろっている。世界中の民族がそうかというそうではないのです。僕が長年付き合い合っているアマゾンのある民族の人たちは全員O型です。それからアメリカ大陸のほとんどの先住民がO型です。ヨーロッパ人でも4つの血液型が全部そろっていないところもたくさんあります。4つ揃っているところは逆に珍しいのです。なぜかという混血を繰り返したからですね。

〈日本人のルーツをたどる〉

中でも主要なルートを辿ろうと思って最初に始めたのが北方領土です。シベリアからサハリンへ。宗谷海峡をカヤックで渡って北海道に着いた。それは変わった人たちで北が好きなのというか、アフリカを出て北に向かった人たちっていうのは変わり者だと思います。普通は緯度を変えない方が生活は楽なはずですよ。そういうわけで東か西に行こうとします。だから多くの人は東に向かったと思います。でもヒマラヤ山脈にぶつかってしまう。そこで縦走しようとは思わない。だからその山麓を歩いていった分、インドシナに行ったのだらうと思います。氷河時代、ベーリング海峡が陸続きであったように、昔は海面が百メートル以上低かったのです。だから実は、インドシナからマレーシア、インドネシアの西部は当時くっついていました。スンダーランドといわれており、たぶん氷河時代だから熱帯ではなくて過ごしやすい温暖な気候だったと思います。そこにいったん留まって、中国を北上して朝鮮のところから入ってきた人たちがたくさんいたと思っています。それを僕は南方ルートと言っているのですけれども。それも今年1月で終わりました。今準備しているのは海のルートです。そのスンダーランドまで行ったけれども、その後、陸路ではなく海をやってきた人もいるだろうと僕は思っています。否定する人も多いのですが、安全ではないし一人で行こうとしても、子孫が残らないということで家族も一緒に連れて移動するわけです。子供もいるし年寄りもいる。そうしたらやっぱり安全な陸路を行くだろうというのが否定する論者たちの意見です。しかし、陸より海をやって行ったほうが楽に行けるという面があります。歩かなくてもいい。だから僕は海をやって来た人たちもいるだろうと思って、そのルートをやろうと思っています。

〈新しいグレートジャーニーのかたち〉

ただし、今回の今までやってきたグレートジャーニーとは違う形で始めました。一つは南米からアフリカまで向かって太古の人のやり方を全く真似たわけではないのです。実は再現したいと思いました。しかし、家族を連れてとなると自分の娘がまだ2歳になったばかりでちょっと難しいということもあったのですけれども、もっと難しいのは採集狩猟しながら移動するということです。たぶん1週間、10日間続けていたら警察に捕まってしまう。ですから再現はできない。でもせめて同じような寒さ暑さ風、匂い、埃、そういうものを感じながら自分の腕力と脚力で旅することにしました。それでも今回は全くの再現というのはできません。しかし、それに近いことをしようと思っています。少なくともカヌーで来ようと思っています。カヌーに関しては宗谷海峡やベーリング海峡を渡ったようなブラックファイバーのシーカヤックを使うなんてことはやめようと思いました。では自分で作ろう。どうやって作ろうか。

〈船造りのコンセプト〉

一つ、時代設定として縄文時代と設定しました。最初に海からやってきたという人たちはやっぱり縄文時代だと思っています。というのは、氷河時代は黒潮の流れが寒流のほうが強かったのです。氷河がたくさんあって寒いからです。寒流が強くて黒潮は一万年前では九州にぶつかっていないのです。東にそれていたのです。それがだんだん氷河時代から暖かくなってきてやっと黒潮の力が強くなって九州にぶつかって対馬にも入って行くようになるわけです。だからそれ以降ですから縄文時代に入ってからだと思います。それだけではなくて、それ以降どんどんいろいろな人が入ってきて現在もいろいろな人が入ってきている。それでですね、縄文時代の船が現代にまで残っているのかというと、たくさん残っています。6000年前、7000年前の丸木舟がいろんな博物館にあります。かなり保存良く残っているものもあります。では、それを作ってインドネシアから来ればいいのかということではないのです。なぜか、それに気がつく人いますか？要するに私のやっている旅はTVのタイトルが間違っていて「日本人のきた道」としてしまったのです。「日本人が来た道」とするとおかしいと思いませんか？要するに日本人というグループがもともといて、そのグループがとことこ日本にやってきて住むようになったってことになりますよね。決してそうじゃないわけです。いろいろなところからいろいろな民族が集まってきてそこで混血を繰り返してきたのです。日本という称号が使われたのはやっと7世紀ぐらいからです。そこから日本という国ができたわけで、日本人というグループがやってきたわけではない。だから縄文人というグループがやってくるわけがないのです。ですからインドネシアあるいはインドシナからやってきたとしても、いろいろな人がやってきてそれで北からやってきた人と交わって旧石器時代にやって来た人たちが縄文時代を築いたか、あるいは縄文時代にやってきて、縄文時代の人と混じり合ったかなのです。だから縄文時代の船を作ってやってくるというのはおかしいわけです。縄文時代というのは今どんどん古くなってきています。つい最近まで2300年前に縄文時代は終わったと言われていましたが、それが2500年前に遡っていました。ところが一昨日、人類学会で話をしてくれと言われたら、実は最新の調査では3000年前になっていると言われました。測定の技術が進歩してどんどん年代が古くなってしまったのです。そのため、3000年前以前のインドネシアに船があって、その船でやって来ればいいのかです。今年の春に行って来たましたが、当時の船なんて見つかりません。熱帯ですから全部腐ってしまいます。では文書で資料は残っているかということオランダ人やポルトガル人が入ってきた後の資料はありますが、それ以前は文字がないから記録がないのです。それで困ってしまいました。

今でも丸木舟を作って航海をしている人がいるか否か調べてみてもいません。帆船すらないのです。5m、6mくらいの帆で走る小さい船はあるんですが、10mくらいの船で外洋に帆を使って走っているというのは少なくともインドネシアにはない。唯一ひとつの民族がレースを始めて、それはドイツ人のある研究者がそういう風に仕向けたのです。要するにその船は残していきたいということでレースを始めた。そうしたらみんな夢中になってそのレースのために船を再建し始めて、今では50数隻が毎年一回レースをするようになっていました。その民族だけです。では、どうしようかと思って、その縄文時代のコンセプトだけを大事にしようと思いました。縄文時代はどのような時代かということ、弥生時代とは明らかに違うのです。縄文時代と比べると弥生時代はむしろ私たちと近い時代になります。なぜかということ水田稲作という集約農業を始めます。それから金属器を使います。縄文時代はどのような時代かということ、今世界中で誰もがやっていない暮らし、どのような暮らしかということ、食べ物を含め必要なものをすべて素材も含めすべて自然の中から取ってきて自分たちで作ってしまうという暮らしです。そのコンセプトを持って船を作ろうと思いました。自然から物を取ってきて自分で作るということを皆さんも多分

やっていないと思います。今自分の身の回りの物、持っている物、家に帰って見回してみる。このセーターとかも自分で編みましたと言う人がいますが、ではその糸は自分で羊やアルパカから毛を刈って糸紡いで作ったの？と言うとそうじゃないですって言います。ですから、唯一あるとした家庭菜園で作る野菜とか米とかかも知れないですけど、それも栽培したものであって自然から取ってきたものではないのです。そういう意味ではほとんどないということになります。実はアマゾンの人たちもやってはいない。まだ外との交流が全くないという人たちもいます。でもその人たちも完璧にはやっていません。外からいろんな物が入ってきてしまっています。

〈鉄を作る〉

そういうコンセプトで作ろうと思ったんですけれども、一つだけ気になるものがありました。それだけは使おうと思ったものがあります。それは何かと言うと鉄です。なぜかと言うと、世界にはいろんな素材があります、プラスチックとかゴムとかガラスとか。そういういろんな素材があるけれども、赤ちゃんを含めた 65 億人世界中の人々が、その素材の恩恵にあずかってない人が一人もいないという素材があります。それが鉄です。というのは最近またアマゾンで新しい先住民族が見つかったという報道がありました。行ってみるとなぜかそこにはナイフがあります。なぜかと言うと、本当に必要なものというのは私たちが持っていなくても交易で流れていってしまうんです。でもそれが鉄だけなのです。鉄は縄文時代にあったかという、あった可能性はあります。というのはもう 4000 年以上前にトルコで鉄ができていたわけなんです。その後、インドにすぐに渡りました。だからあってもいいのですが確実にあったかどうかはわからない。弥生時代には確実にありました。インドとの結びつきがインドネシアは強いのでむしろ縄文時代よりも古くに鉄があった可能性もあります。だからいろんな素材の中で、縄文時代とはちょっと違うのですけれども鉄だけは使ってみよう。でも大事なコンセプトである「自然から取ってきて作ろう」ということは守ろうということにしました。では、どうしたらいいのか。その鉄鉱石を取ってきて溶かさなくてはいけないと思ったら、幸いな事実がわかりました。というのは日本には日本刀というものがあります。日本刀をまだ作っている人たちというのが何人かいるわけなんです。そういう人たちが神戸製鋼や新日鉄の鉄から作っているのかというと絶対にそれでは作れないのです。たたら製鉄、砂鉄から作った鉄から作ります。ですから、たたら製鉄がまだ残っていたわけなんです。しかし本で調べたら、そのたたら製鉄に関する記述はほとんど見つからないのです。現在やっているたたら製鉄を聞いたことありますか？もののけ姫で出てくる製鉄法です。ところが、インターネットで調べたらものすごい数がでてきます。というのは研究会とか実験をしていたり、そういう人たちが全国にいるのです。それから日本刀作りのために供給源になっているのは出雲です。そこではたたら製鉄を本格的にやっています。じゃあ砂鉄を集めてそこで製鉄をすればいいではないか。ということで砂鉄集めを始めたのです。

〈プロジェクト開始〉

このプロジェクトを始めるにあたって、私は武蔵野美術大学（以下、武蔵美）で文化人類学を教えるもう 5 年になります。いろんな学生や卒業生たちに今度どこか行く時には連れてってくださいとよく言われますが、全部断ってきました。若い時は旅というものは全部一人ですものだと言って拒絶してきたのです。一つは事故があった場合、在校生の場合は大変だということもありますし、国内の場合は安全策を慎重にとって連れて行ったこともあるんですが、海外は連れて行きませんでした。けど今回は武蔵美の学生だけではなくていろいろなところで声をかけたのです。なぜ声をかけたかという、そう

いう自然から物を取ってきて自分で作るという行為、そして自分の教えている大学がデザインだとかアートといった物作りをする大学だからです。物作りをする人たちにとって、そういう自然から物をとってきて自分で作るという体験は少なくとも一回は必要だと思いました。そしてそれをすることによっていろいろな気付きがあるだろうと思ったのです。ですから最初はマンパワーがいるからといって声をかけたのですが、みんな集まったところで「お前たちの力は必要ない、でもチャンスを与えてやるから一緒にやらないか？」と声をかけました。武蔵美だけではなくていろいろな大学からきています。200人以上の若者がいろいろなところで何らかの形で関わっています。砂鉄集めを最初に始めました。砂鉄を集め始めるのですが、鉋とか鑿とか斧とかのようなたった5キロの工具を作るのに150キロの砂鉄を集める必要があるのです。刀鍛冶に会えばたたら製鉄をしている人たちに会えるだろうと思いました。最初は奈良の刀鍛冶の息子と知り合って、その人のお父さんがもう人間国宝になれるような人で、ちょっと訪ねて行ったら協力してくると言ってもらえたのです。出雲でたたら製鉄やっている人を紹介してくださいって言ったら、「いや出雲まで行かなくてもいいよ。東京でやってもいいのでは？」と言われました。東京でできるなら東京でやりたい。そして東京に帰ってきて調べてみると東京工大に「物作り教育たたら」というNPOをやっている先生がいて、その人はたたら製鉄をやっていました。会いに行ったら、武蔵美でやってもいいよと言ってくれたのです。ところが5キロの工具を作りたいと言ったら120キロの砂鉄を集めるように言われました。それも江ノ島とか湘南ではダメだと言うのです。なぜかというチタンとかナトリウムとか硫黄が砂鉄に混ざっていたら良い物ができない。九十九里なら良いと言われました。そして、しばらく九十九里まで通いました。それが異様な光景なのです。みんな磁石持って、サーファーがたくさんいる中で磁石持って滋味に砂鉄を集めている人たちがいる。それで何回も通って、150キロの砂鉄を集めたのです。何回も通っているうちに東京工大の先生がそんな無理しなくてもいいよと、九十九里の砂鉄はニュージーランドの砂鉄に似ているし、それもいっぱい輸入しているからそれを買えばいいよと言ってくれたのですが。「いや、自然から取ってきたやつじゃないといけないのです。自分で集めます。」と言いました。そう言うと指導してくれる側も、本気だということを知ってくれてものすごく真剣に教えてくれるようになります。それは刀鍛冶も同じです。本気でやるという姿勢を示すと、今年の4月に砂鉄集めをして、「いつまでに道具がほしいのか」と言われて、「8月ぐらいまでにほしいです」と言うと、「そんな早くにできるわけがない」と言われたのですが、ものすごく本気だということが伝わったら本当に7月までにできてしまいました。

〈炭焼き〉

砂鉄を集めた後に炭で焼かなくてはいけない。それも300キロです。5キロの鋼を作るのに300キロの炭で焼きなさいと言われ、それを買いなさいと言われました。「でも自分たちは炭も自分たちで焼かなくてはいけないのです」と言ったら、「300キロって大変な量だよ」と言われました。しかも杉・ヒノキの炭ではいけないのです。軽い炭ではダメなので。窯は多摩動物園とか東京近辺にたくさんあります。それで東京近辺で焼こうと思ったら難しい。ここで新しい発見がありました。何が難しいかというと、東京の木は杉・ヒノキだらけなのです。松はほとんどないのです。岩手に行けばあるということで行ってみるといいおじいちゃんに出会いました。杉原さんという炭焼き爺さん。その人は60歳まで官僚だったのですが、60歳を過ぎてから炭焼きは世界を救うと言って世界中で炭焼きを教えていて83歳で未だにナイルを緑にすると言って炭焼きをナイルでやっている爺ちゃんです。燃料としての化石燃料が終わってしまっていて、森林の枝打ちや間伐とかをしなくてはいけないから、それを使って炭を作れば炭が世界を救うと言って、特に海外の途上国に炭焼きを教えて回っています。その人が教えてくれると言

うので岩手まで行き、布施焼きという自分たちでも作れる炭焼きを教えてくださいました。そこには窯もあるので窯でも焼きました。驚いたのは300キロの炭を作るのに3トンの松が必要だということです。ということは、たった5キロの工具を作るために3トンの森を壊すわけです。要するに鉄作りのためにいかに森が破壊されてきたかということです。そういう気づきを若者たちにしてもらいたかったから今回は若者を呼びかけました。要するに頭で考えて社会のこととか自然のこととかを考えるのではなくて、実際に動いて実感してもらいたい。文化人類学を5年間くらい教室で教えていても、もう限界を感じていて、この若者たちを外に出した方がいいなと思って始めました。

〈鉄のすごさ〉

こういう鉄というもののマイナス面もあるのですが、もちろん鉄のすごさというのもあるのです。本当に必要なものだから世界中の人たちのところに入って行く。本当に鉄はすごくて、鉄が発見された時、金の価値とどれだけ違ったかという鉄は金の4倍の価値があったのです。鉄の方が上だったのです。なぜかという、金なんてほとんど役に立たないんです。社会を変えるのは何かという、おそらく、鉄を制してきた者が世界を制してきたと思います。というのは農耕をコントロールすることと戦争に勝つために強くなるのが一番の道です。農具と武器は全部鉄なのです。

日本の歴史でもそうです。ここ関東で朝廷に対して平将門の乱というのが起こります。彼が鉄を作り出したからです。利根川の流域にはたくさんの鉄を作った後の遺跡があります。利根川というのは人工的に作った川なのです。その利根川の群馬の水源には吾妻川というのがありますが真っ赤です。鉄がいっぱいあるからです。利根川には粒の鉄がいっぱい落ちています。それだけ鉄があるのです。それを溶かして使ったのです。それが朝廷にとっては許せないことだったのです。弥生時代とか朝鮮半島に鉄ができたときでも実は鉄の作り方いうのを中国は日本には教えていません。材料は送っても、作り方を教えてしまうと貢いで来ないからです。つまり、言うことを聞かなくなります。だから教えませんでした。それほど鉄はすごい素材なのです。なおかつ私たちが住んでいるこの地球の重さの3分の1が鉄らしいのです。私も今年になって気づきました。そしてさらに私たちの体の中から鉄が全部なくなったらどうなると思いますか？酸素が供給されなくなり、明日までに死んでしまいます。それほど鉄というものがいかにすごい素材かということに気付いていかされるわけです。

〈たたら製鉄〉

これがたたら製鉄です。自分たちで窯を作って、砂鉄と炭を交互に入れていくのです。この鞆も自分たちで作りました。というのは手動の鞆というのはないのです。みんな電動でやっちゃっているのです。それはやっぱりまずいだろうということになります。幸い私たちは物作りが得意な大学なので器用なやつがたくさんいます。作り方を知っている職人さんに学生たちを派遣して教えてもらってきたら何人か掛かりで5日間くらいかけて作ってしまいました。それでこれは25時間ぶっ通しで踏み続けるのですけれども、一度に30キロしか砂鉄を入れられないのです。30キロの砂鉄から5キロの「けら」という本当に粗い鉄ができるのですけれども、それを4回やらなければならない。1回6時間かかるのです。4回やって交換する時間も含めて25時間ぶっ通しで鞆を踏み続けて鉄を作りました。これが出てきた「けら」という粗い鉄です。やりきったのでみんな清々しい顔をしていました。「けら」が全部で20キロくらいあります。奈良で日本刀を作っている人の所へ持って行って、それを火の中に入れて炭素を加えていくのです。それを叩かなくてはいけない。叩くことはやらせてくれるのですけれども、本当にお手伝いしかできません。慣れない手つきで叩かせてもらいました。だんだん鉄らしくな

っていきます。

刀鍛冶の人は工具を作れません。日本刀は作れるけど、鉋とか斧とかは作れないのです。それをやるのは野鍛冶という農耕具を作る人達です。その人に最後に仕上げを手伝ってもらってできました。

〈いざインドネシアへ〉

この工具をもって7月の中旬にインドネシアに行きました。行って、船造りを始めたのですが、木を切って船を造り始めて、私はちょっと日本に用事があったので一時帰国していますが、今まだクルー候補になる卒業生2人の若者と撮影・記録をしたいというグループが3人、インドネシアにいます。今ちょうど荒削りが終わったところです。こういうことを通じていろいろな気付きがあります。本当に自然から取ってきて船を造るといって帆も自然から取ってこないといけないのです。帆もロープも全部取ってこないといけないので、この汁を抜いたヤシがありますがこれからロープを作ります。帆もナイロンとか使えないのでこのラヌーというヤシの仲間ですけれども、この若葉を割いて繊維を作って織ります。この織物は30年前までは使っていたそうです。縦糸を作るのが難しいです。

〈すべて自然のものから作り出すという難しさ〉

私が目標としている自然から全部ものを取ってきて全部自分たちで作るということをやろうとしたら30年かかるということがわかりました。砂鉄集めはできます、たたら製鉄もできます、でも刀鍛冶のそこへ行ったら自分たちのやれることは限られてしまうのです。やっぱり10年以上は修業が必要です、野鍛冶も同じです。帆を織るといって縦糸を入れていくことは非常に難しくてやっぱり何年も修業が必要なのです。そういうことで非常に難しいということがわかりました。まずは木を探さなくてははいけない。できたら丸木舟を作りたいので太い木を探さなくてははいけない。そして探したらないのです。何でないのだろうと聞くと、「昔はあったのだけどね」と言うのです。それにはいろいろな原因があります。一つは国内移民です。ジャワとかバリとか人口があふれている。インドネシアは日本の倍の人口があります。2億2千万人ですか。それがジャワとかバリに集まってきています。だから空いているところに人口を送りたいとなると、そこで家を作りたいとか薪がないとか生活のために木を切らなくてははいけないわけです。それでバンバン切っていきます。また、中国や日本に昔は木材として持って行ってしまったという経緯があります。それで切ってしまったから今はない。しょうがないのでどうしたかという、直径80センチくらいの木を切ったのです。切ったのですが船底部だけしかできない。それだと高さが40センチ、幅が65センチしかない。それでは危なすぎて日本には来られません。日本に来られるようにするにはどうするかというと板を接がなければいけない。30センチか40センチを二枚足す。そうすると想定外のことが出てきました。何かというと、ノコギリを使わなくてははいけない。でも用意してなかったのです。作ろうとしても時間がかかるし、それからドリルも使わなきゃいけない。それでちょっと落ち込んでいました。やっぱり自分のそのコンセプト通りにはできない。でも、もう一度大きい木を探してみようと思って9月にまた搜索に動きだそうとしたのですが、インドネシアは9割がイスラム教徒なのでラマダーンという聖なる月があるのですが、毎年違うのですが、それがたまたま9月だったのです。今年は9月で日中は断食をしますが、ほとんどの人は働かないのです。作業が全然進まない、私たちも断食に付き合ったのです。それで、ノコギリやドリルを使うのが腑に落ちなかった、もう一度探し始めて、前に船底部を作ったところに行って鬱蒼とした森を探し回りました。そして見つけました。着生植物に囲まれているのだけれども中の木はどう見ても直径1.5メートルくらいはありそうなのです。しかし太さが測れない。これはアマゾンでもよくこういう

木はあるのですけれども、イチジクの仲間です。それが飛んできて、大木に着生して、芽を出して、どんどん上下に枝を伸ばして行って、地面に着いたら根を張って、どんどん大木を取り囲んで行って、最後は絞め殺してしまうのです。で、和名が「絞め殺しイチジク」というのです。最後は腐った木をも栄養にしてイチジクになってしまうという、そういう木の仲間です。これも候補には入れていたのですが、その時はこれではなくてもっと良い別のものを探しに行ったのです……。

(この後も、関野さんの映像を交えた貴重な実践をお話ししていただきました。)